

# 呉越国の功臣寺遺跡発掘研究

朱 曉 東<sup>※</sup>

訳 甲 斐 雄 一

## 1. はじめに

呉越国は唐末の藩鎮が割拠した状況で誕生した。初代・錢鏐は呉越国の地勢・軍事共に不利な状況から出発し、時勢を読みながら「中国に善事し、境を保ち民を安んず」治国の方策を行って、この戦乱の時代に両浙地区の安全と秩序を保持した。「烽火 天下に遍く、平安 独り此の邦のみ」、呉越国の生産は増大し、経済は繁栄し、社会は比較的調和がとれ、人々の憧れる楽土となった。

先祖以来の仏教を尊重する伝統の薫陶を受けて、錢鏐とその後の三代五王はみな仏教を厚く信仰した。「仏を信じ天に順う」を信条として、仏教を奨励し、祠廟・寺塔・石幢を建立し、石窟を掘り像を造ることも盛んに行われ、呉越国の仏教信仰を大いに隆盛させた。仏教関連の建築や石刻は、その数はもちろん、芸術性も極めて高い水準にある。呉越国の首都杭州に限っても、時代の裏付けが取れる寺院は200を越え、領有する14州全体では数え切れないほどで、「寺塔の建つるや、呉越の武肅（武肅王錢鏐）九国に倍す」とうたわれた。両浙地域には寺院が遍く、石幢は林立し、信徒は数多く、高僧は教えを広め、梵語は絶えることなく、信徒にとって理想の「楽園」となり、「東南仏国」の名声をほしいままにした。



慈雲嶺石像



梵天寺石幢

※ 臨安市文物館（館長）

錢氏の地方政権は仏教を尊重し、「域中を教化する」ことを国を治める手段の一つとしたが、国家全体に濃厚な仏教の雰囲気と、大衆化した仏教教義の伝播は呉越国の政治的実践にもかえって強い影響を及ぼした。呉越国の統治集団はこれらによって政治的に自らを神と化すことに成功し、民衆を教化し、人心を落ち着かせて社会の調和と安定を維持し、錢氏の統治者としての地位を強固なものにし、ながら国家経済の穏やかな発展と文化や科学技術の繁栄に貢献した。

臨安は呉越国始祖の錢鏐の故郷であり、呉越国の先祖の発祥の地として、仏教教義を研究しまた広くに伝え、仏教經典について講演し、民衆を教化した。仏教寺院も建立し、功臣寺・浄土寺・浄度寺・海会寺などはみな当時の著名な仏教寺院であった。



海会寺遺跡

## 2. 功臣寺遺跡の発掘調査

2003年10月、臨安城南、功臣山の南麓の錢塢壟で大型の古代建築の遺跡が発見された。面積は約10,000㎡で、建築物の遺跡・塀の一部の跡・レンガ（石）製の排水溝・石畳・中庭の舗装が発掘され、土中からは一部のかわら・陶磁器が発見された。建築物の形状や出土物は唐末五代頃の特徴を有しており、文献資料の記述と遺跡の東側に良好な状態で遺っていた建築物、婆留井の考証とを対照した結果、呉越王錢鏐が当時「住まいを喜捨して寺とした」功臣寺の遺跡であることが判明したのである。

功臣寺遺跡の北にそびえる功臣山は、錢鏐が埋葬された山である。元は大官山といったが、錢鏐が両浙地方を平定した功績を賞し、唐の昭宗の詔によって改名された。山頂には功臣塔があり、五層四面の木造の楼閣を模したレンガ製の塔で、全長25.3m、基底は高さ0.44m、一辺が5.36mで、塔内部の一辺は2.36mである。塔本体は22.06m、下から上に向かって四角の面積が狭まっており、内部の方形は上下つながっている。外壁には一層・一面ごとに壺門があり、楹柱（壺門の端の柱）と倚柱（塔身に半分凸起している柱）は隠れる工法を用い、各層の腰檐の部分は方形のレンガを積み上



功臣寺遺跡



功臣塔

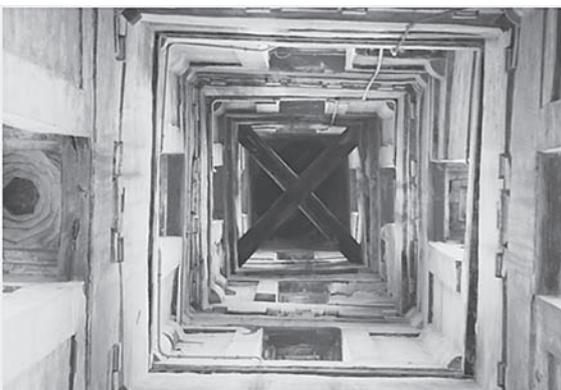
げて組み、下に五段組の鋪作を三つ設けて支えにしている。壺門の下には平座(足場)を設け、腰檐同様に方形のレンガを積み上げ、四段組の鋪作で支え、第三層以下には升組がある。頭頂部の塔刹は高さ 2.8 m、鉄を鑄造して逆さまの鉢と宝珠を組み合わせた形に作っている。

功臣寺は浙江省に現存する最も初期のレンガで建てた方塔で、唐代の方塔の遺制を踏襲する、五代の方塔の典型例とも言うべき作品である。

功臣寺については、『臨安県志』輿地志・古跡に「治南功臣寺は、乾化年間に呉越王が功臣堂を喜捨して建てたもので、第十九子の普光(錢元玩)七宝陀羅尼經を講じたところ、天がこれに感じて花を降らせたので、雨花台と名づけた」とある。

婆留井の名前と功臣寺との関係については、同じく『臨安県志』輿地志・古跡に「婆留井、または鎖井。武肅王(錢鏐)は生まれたとき変わった相貌であったので、井戸の中に棄てられたが、お婆さんに助けられた。このため幼名は婆留であったが、後『留(りゅう)』を『鏐(りゅう)』として錢鏐と名乗った。現在は封じられ、よろいかぶとを埋めて、鎖で閉ざして二度と使わないことを示している。その地は喜捨されて功臣寺となっている」とある。

文献資料に見えるこの二つの記述から、この寺の由来・名称や遺跡の性質を読み取れるだけ



功臣塔内部



功臣塔外部



婆留井

でなく、寺院が建てられたおおよその時間を推定することができる。功臣塔が建てられたのが五代・後梁の貞明元年（915）、功臣寺の建立も乾化年間（911-15）とあるので、寺院と塔がほぼ同時期に建立されたことがわかる。

功臣寺遺跡は明らかに廊院形式（中軸にそれぞれの建物を配置して回廊でつなぐ形式）の配置を呈しており、中軸線は北西29度の線で、秩序とその対称性が強調されている。全体は三



東側の中庭・鐘楼（南から撮影）



東側の中庭・鐘楼（東から撮影）

組の構造になっており、南から北に前殿・中庭・鐘楼などの建築物・大殿・中庭・廊下・後殿及び左右の廂房で構成される。三組の構造は、三層の台地という地形に沿って配置されている。

そのうち、大殿・右の廂房・鐘楼の遺跡ははっきりしている。遺跡の南側には、建造の時期が比較的遅い道路と塀の一部の跡がある。道路の現存部は50 m、広さ2 mで、長方形の石とレンガを敷き詰めて作られている。塀の跡もレンガが傍らに敷かれており、その形と構造から見て土を固めた塀であった可能性が高い。塀の後ろは前殿の区画であるはずだが、建築物の遺構はまだ発見されていない。



遺跡南部の道路遺構

遺跡の前部の中庭は面積が400㎡で、中間にレンガを敷いた広さ5.2 mの小道が遺っている。中には菱形の模様がはっきり確認できる箇所があり、東側にはレンガを縦横に並べた席紋の舗装が良好な状態で遺っている。



席紋のレンガ舗装

になっている。四隅には大理石を用い、側脚（檐を支える副柱）があるが、これらは唐五代から宋にかけて採られた建築手法である。

大殿の北側は細長い中庭で、その地面は大殿より0.4 m低い。そこには9つの柱石が保存されており、配置から見て左右に二間、奥行きに二間の間取りで、左右7.6 m、奥行き5 m、おそらくは大殿と後殿を結ぶ廊下のような建築物があったのであろう。

さらに中庭の東側には、6 m四方の基底部がある。この基底部はレンガを積み上げて作られており、周囲には整った排水溝があることから、この上には鐘楼のたぐいの建築物があったことが推測される。

遺跡の中心部分は一層目の台地にある大殿の基礎である。この基礎は中庭の地面より0.5 m高く、長さ25 m、広さ18 m、面積は450㎡である。土台の周囲はレンガを積み上げ、上に行くほど密



中庭東側の方形基底部



大殿と後殿のつながる所

中庭の左右にはレンガを積み上げて取り囲む形の基底部がそれぞれ一つずつある。広さ2.5 m、長さ9.6 m、現存部の高さは0.75 mで、花壇のようなものであったと考えられる。

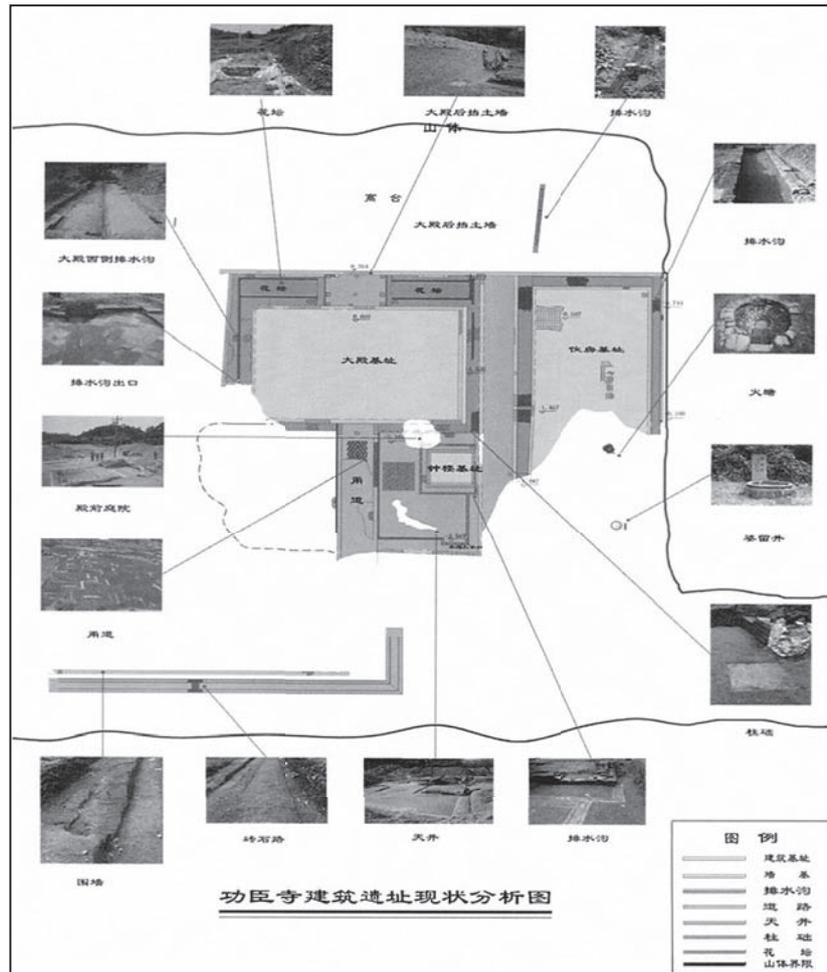
中庭の後ろは高さ約1.8 mの擁壁の塀で、一部の塀は二層のレンガで出来ている。その後ろは三段目の台地である高台で、ここには鷺卵状の石の舗装の一部と排水溝のごく一部が遺っている。

大殿の東側、山との間に廂房らしき建築の

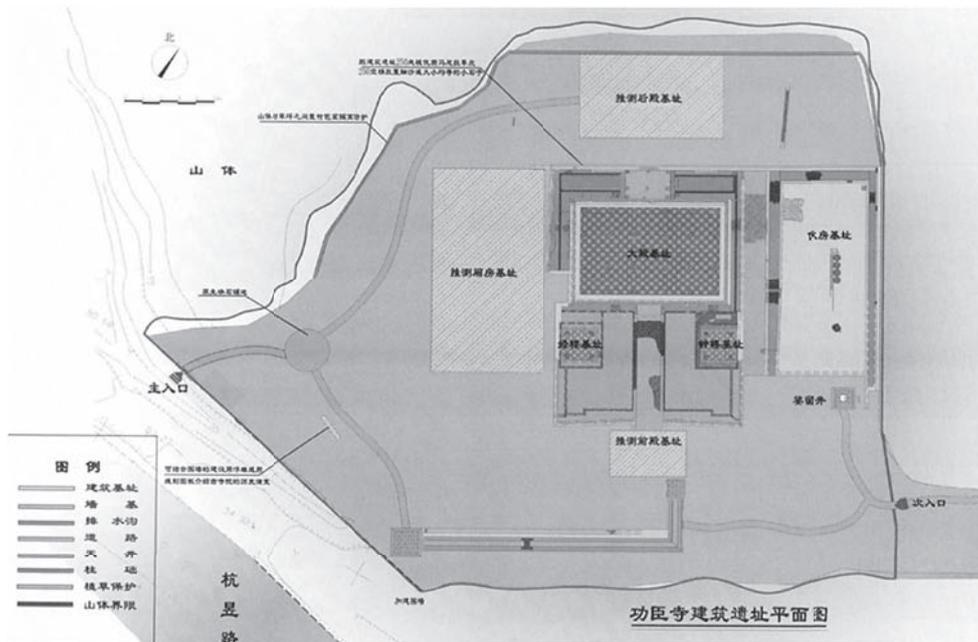


三層目、鷺卵状の石の舗装

功臣寺建築遺跡の現状分析図



功臣寺建築遺跡平面図



跡が確認された。ここに0.35 m四方のレンガを用いた舗装や、レンガを組み上げた逆さ円錐状の暖炉が発見されている。暖炉は深さ0.65 m、円の直径は約1.1 mである。このほか、四方をレンガで組み上げた浅い鍋底状の遺構も発見された。おそらくはかまどの底部であろう。暖炉の南から12 mも行けば婆留井なので、ここは台所として使用されていた可能性が高い。



暖炉



排水溝



九山八海の石刻部材

発掘調査では、ほぼ完全な状態の排水システムが確認された。台所の東側、大殿の東西両側に三本の主要な排水溝が造られており、山水を流していたと思われる。大殿・鐘楼・廂房の遺構の周囲にはレンガと石を組んだ副排水溝がめぐらされているが、これらは形式や構造が独特なものと、規模が大きい（排水溝の切断面のアーチ型は、小さいもので幅0.3-4 m、大きいもので1.7-3.3 m）のを除けば、規格はほぼ整っており、配置も理にかなって

いる。

発掘調査の過程で、多くはないが筒瓦・瓦当（かわらの先端で、模様や文字のある部分）・陶製の動物・越窯の青磁・龍泉の青磁の破片が発見された。これらの建築部材は精緻な作りで、規格も大きく、これらからも建築物の規模や形態を窺うことができる。磁片のうわぐすりや形の時代的特徴は特に明確である。



陶製の動物の破片



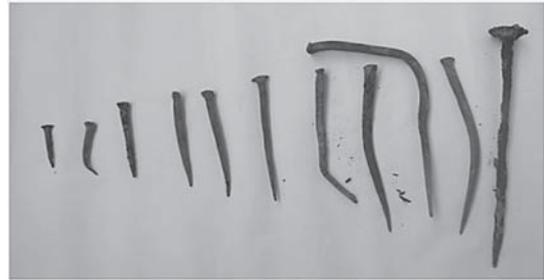
筒瓦



瓦当

### 3. おわりに

功臣寺遺跡で発見された考古資料によって、文献にある錢鏐の「住まいを喜捨して寺とした」ことや、錢元玩が王家の自院を主宰していたことが裏付けられた。これにより呉越国の歴史文化遺跡はさらに充実し、臨安錢氏の故郷の歴史的足跡はさらに明確になり、呉越文化の馥郁たる香りはさらに濃厚になった。そして、これらは呉越国の仏教崇拜と当時の経済・文化に



鉄釘

関する重要な資料価値を有するものである。

功臣寺遺跡は江南地域で初めて比較的整った形で発見された唐末五代の典型的な仏教寺院の遺跡であり、唐から宋への仏教建築の間を埋める意義を持つ。その規模や形態、配置は晩唐呉越国の建築スタイルや建造の特徴を探る上で実例かつ典型例となりうるであろう。

今回の遺跡の発見は、中国建築史研究における唐末五代の建築遺跡という研究資料の不足を補うものである。遺跡の規模の大きさ、状態の良好さは浙江省で確認されている同時代のどの遺構よりも優れている。この遺跡は敦煌壁画に描かれる晩唐期の寺院と構造が一致しており、塔を中心とした配置から殿を中心としたそれへの変遷を裏付けているのである。



陶磁片